

417 14才の中学生に発生した卵巣粘液性 嚢胞線癌(mucinous cystadenocarcinoma)の1例

社会保険埼玉中央病院

伊藤仁彦, 西野るり子, 山崎裕哉, 亀井一彦,
北井啓勝, 青木淳一, 金子宜淳

【緒言】小児に発生する卵巣悪性腫瘍は, 成人とは異なり胚細胞性腫瘍が主体をなし, 上皮性腫瘍の発生は非常に稀である。特に15才以下の報告は極めて少なく, 数例の文献的報告を認めるのみである。今回我々は, 14才の中学生に発生した粘液性嚢胞線癌(mucinous cystadenocarcinoma)の1例を経験したので, 若干の文献的考察を加えて報告する。

【症例】14才10ヵ月。中学生。身長 155 cm, 体重 51.5 kg。家族歴・既往歴に特記すべきことなし。

主訴は腰痛・下腹部痛。平成2年6月22日朝, 前記主訴出現。近医内科医院受診し, 婦人科受診を勧められ, 6月23日当院初診。

初診時, 双手拳大の腹部腫瘤を触知し, 圧痛を認めた。血沈 8/21, 末梢血検査・血液生化学的検査において特に異常を認めず, 腫瘍マーカーも異常値は認められなかった。

超音波断層検査・CT検査において, 長径約16 cmの楕円形が多嚢胞性腫瘍を認め, solid partも認められ, 悪性腫瘍が疑われた。

7月5日開腹時, 少量の漿液性腹水を認め, 左卵巣が双手拳大に腫大しており, 右付属器および子宮には特に異常を認めなかった。左付属器切除術・右卵巣楔状切除術・大網生検術を施行。

病理組織学的診断は, mucinous cystadenocarcinomaであった。

化学療法(CAP療法)3クール施行後, 現在経過観察中であり, second look laparoscopyを予定している。

【結語】14才の中学生に発生した卵巣粘液性嚢胞線癌(mucinous cystadenocarcinoma)の1例を経験した。

418 思春期に子宮頸部から発生した Sarcoma Botryoides

宮崎医大, 野田産婦人科*

三部正人, 池田智明, 山口昌俊, 山元清美
小池弘幸, 森 憲正, 野田 彬*

【目的】Sarcoma botryoidesはembryonal rhabdomyosarcomaの亜型と考えられ, 乳幼児の腔粘膜下より発生するものが一般的である。しかし思春期に発症するSarcoma botryoidesは, 子宮頸部発生のもものが多く欧米でも報告例は少ない。今回我々が経験した症例(13歳, 中学生)は我が国で最初の報告と思われ, 治療法, 転帰など腔粘膜下より発生するとは異なることから形態的, 病理学的特徴, IRS分類および治療法などを比較検討し報告する。[成績および経過]不正性器出血と外陰部腫瘤を訴え受診し, 子宮頸部から腔内へpolyp状に発育したクルミ大の腫瘤の摘出を行った。この腫瘤の組織学的所見では横紋構造の明瞭なrhabdomyoblastを認め, その背景はmyxomatousであり, 一部には正常頸管腺組織を含んでいた。細胞分裂像は数視野にわずかに認められた。子宮頸管および内膜生検では残存腫瘍細胞は認められず, 転移を疑わせる所見がないことから, 子宮頸部より発生したSarcoma botryoidesでありIRS分類のGroup Iaと診断した。治療にはまず単純子宮全摘術を行った。開腹所見, 摘出した子宮には悪性を疑わせる所見はなかった。追加治療としてVAC(vincristine, Actinomycin D, cyclophosphamide)療法を行い現在良好な経過を得ている。[結論]現在までに国内では子宮頸部発生のSarcoma botryoidesの報告はないが, 欧米ではVAC療法のみで良好な転帰をとったという報告もある。思春期の子宮頸部発生Sarcoma botryoidesのGroup Iaでは妊孕性を残す治療が可能であることを示唆し, 治療開始前にIRS分類を的確に行なうことにより, 肉腫であるために過度の治療が行なわれないことを喚起する症例と考えられた。